

1. 背景

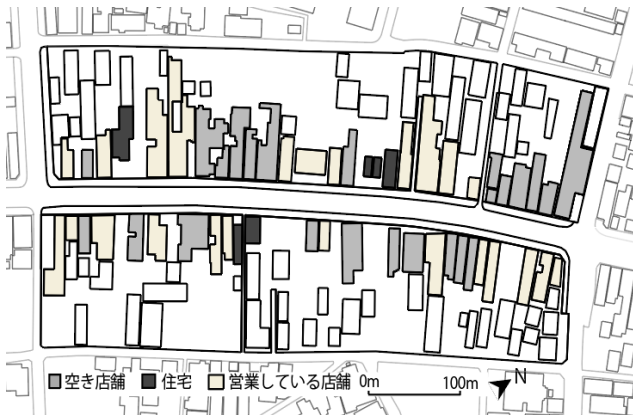
かつて地域の人々の消費と交流の要となっていた商店街は、車の普及や郊外へのコンビニや大型スーパーなどの出店の増加、少子高齢化の深刻化などに伴い、商店街などの中心市街地は目に見えて空洞化してきた。その結果、道路に面する商店街の多くが店舗にシャッターが下ろされたままの「シャッター街」になっている。この状態が続いていくと商店街消滅の危機が間近にせまり、さらなる空洞化へとつながることが予想される。これは、日本全国において深刻な問題となっており、早急な対策が必要になる。

2. 目的

シャッターや壁により閉鎖的な空間になっている商店街を誰でも訪れやすい開放的な空間にすることによって、人通りを呼び戻し、にぎわいを生み出す。商店街を新たな姿へ変化させて幅広い人々が行き交うようなまちの風景を作っていくことを目的とする。

3. 対象敷地

柏崎市市役所の付近にあるアーケードを備えた商店街を対象敷地とする。後継者の不足や人口減少などの要因により、全部で約53軒ある店舗のうち、空き店舗は23軒にのぼり、商店街の約半分の店舗でシャッターが下りたシャッター街になってしまっている。日中の商店街利用者の数も減っていることから、地域の高齢化が進んでいることも伴って、このままでは商店街が消滅する可能性が大きくなっている。



4. 提案

イベント事業などによる一時的なものではなく、永続的な人通りを取り戻すには、まちに活気を取り戻す必要があると考えた。そのため、商店街にある空き店舗をオフィスにコンバージョンすることにより常に人がいる状態にする。働く場を作ることで、市外への若者の流出を防ぐことができるうえ、現商店街周辺に働く人の住居が増え、人々の定住を期待できる。現段階

で商業機能しかない商店街に、新たな仕事、保育、学びなどの様々な機能を入れることでまちとしての活力を生み出すと同時に人材の増加を期待できる。

5. 建築的な操作

にぎわいを生み出すために内部空間を外へとあふれ出させる。閉鎖的だった空間は開放的にするうえ、一体化させる。具体的な操作としては、壁に覆われ閉じられた空間となっている商店街の店舗から一階部分の外壁をすべて取り払う。また、床を様々な形に拡張させることで、内部空間は自然に外へとあふれ出させる。拡張させた床を家具化、空間化にすることより、人々の様々なアクティビティを誘発できる。さらに、建物同士とのつながりを生むように空地も含めた既存のアーケードの高さに合わせ、全体的に透明ガラス屋根をかけて一体となる空間を作る。

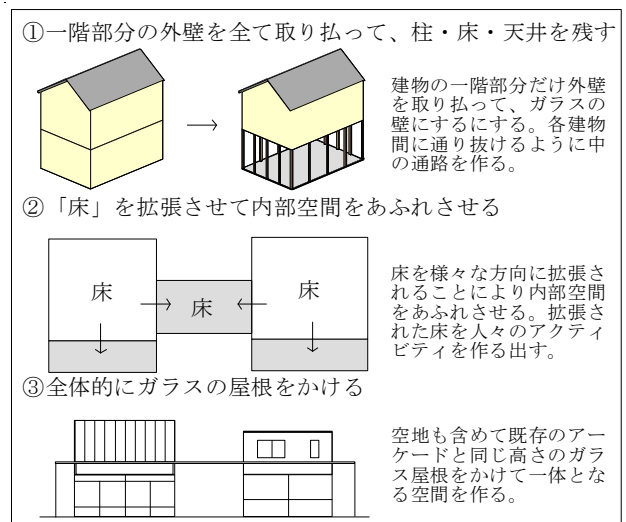


図2：建築的操作

6. にぎわいのある商店街へ

内と外との境界を曖昧にすることによりオフィスで働く人以外にも地域の人も入りやすい空間が作られ、様々な世帯間でのコミュニケーションを生み出す。これにより、幅広い年齢層の人々が行き交うような開かれたまちを形成され、にぎわいを生まれる。



図3：にぎわい商店街